

岡山孤児院児童養護実践における聖書的思考の影響

—明治25年「石井十次日誌」の記述を中心に

○ 佐久大学 高松 誠 (会員番号 007441)

キーワード：児童養護実践史 岡山孤児院 アイデンティティ

1. 研究目的

社会福祉学の進展及び福祉実践の新たな視野獲得のために、過去の社会福祉実践を振り返り、その歴史的な所産に目を向けることは重要であると考えます。2024年に刊行された杉山(2024)では、社会福祉の歴史研究における、キリスト教とキリスト教社会福祉研究の記述方法に着目し、一例として、岡山孤児院創設者である石井十次に関するキリスト者としての評価が、先行研究においては、「敬虔なクリスチャン」像に当てはまるか否かを中心として議論される傾向にあるのではないかと指摘されている。岡山孤児院の歴史的展開の中でキリスト教(プロテスタント/福音主義等)への理解内容は変遷を繰り返している。しかし、キリスト教そして聖書と出会った石井の「信仰」の変遷を批判の対象とするのではなく、そのように至ったという「史実」としてのみとらえ、実践の評価や考察へとつなげていくことが「社会福祉の歴史研究」の役割と言えよう。そこで、本研究では明治20年に設立された岡山孤児院の児童養護実践が形を整えていく明治25年前後の期間に着目して、特に『石井十次日誌(以下『日誌』と記述)』(明治25年)の中で展開されている『聖書』への「読経黙想」に着目し、それらが岡山孤児院の児童養護実践や実践者としての石井にどのような影響を与えていると言えるのかを明らかにしてみたいと考えた。

2. 研究の視点および方法

本研究では、『日誌』(明治25年)より11月3日から12月12日までの40日間とその周辺の記述を史資料として用いる。ゆえに本研究は史資料を中心とした文献研究の形を採る。11月3日の記述では最後に「己らと言ふ細きころすてゝみよ 三千世界さわるものなし」「信仰の生涯」とあり、12月12日の記述では「余今日まで聖書につき殆ど四十日間勉強をなしたり而してやゝ微光を心衷に得たるが如き感あり余は由つて今日を以て読経黙想の時を止め明日より断然働きに着手せん」と記述されているので、主にこの40日間に集中して『聖書』の「読経黙想」が行われたと思われる。本研究ではこの期間を中心として、また当時の岡山孤児院が置かれた状況も先行研究を参照しながら、岡山孤児院児童養護実践への影響を明らかにしていく。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究である。文献を参照するにあたり人物等について配慮しつつ研究を行った。史資料としての『日誌』は、石井記念友愛社の監修のもとに刊行されたものであり大きな著作権等の問題は発生しない。また、本研究は「一般社団法人日本社会福祉学会研

究倫理規定」遵守し研究を行った。引用の際には、自説と他説を峻別し、原著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示した。なお本研究発表に関連して、開示すべき利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

岡山孤児院が明治20年代前半から置かれていた状況について菊池（2000）は、明治24年10月に小橋勝之助の博愛社との合同に着手した。しかし、その後濃尾大震災が発生し明治25年1月には名古屋市に震災孤児院を設立するなど体制が大きく動くことになる。岡山本院と震災孤児院、そして2つの施設の合同という3部体制の中で、財政的にも厳しい状況が生じ岡山孤児院は運営において根幹となる理念を再確認していく必要に迫られた。この状況下で石井は明治25年の『日誌』において①ジョージ・ミュラー（英国ブリストル孤児院創設者）資料の訳聴、②ジョン・モンロー・ギブソン（スコットランド出身、カナダの長老派教会の牧師・聖書学者）による『馬太傳講義』の訳聴を實踐する。石井は岡山孤児院支援者の古藤重光からこの2冊の内容を学び、聖書の理解を深めた。また、この期間中、③旧約聖書「十戒」も読まれており、キリスト教の法的側面に石井は触れている。

『馬太傳講義』において石井は、1）マタイによる福音書第3章の洗礼者ヨハネの記述とイエスの洗礼（神の行いを準備しているヨハネに自身の苦難をしのんでいる状況を重ねていると考えられる）、2）同第5章の山上の垂訓（キリスト教の教えと規範の理解）、3）同9章36節以下の「収穫は多いが働き手は少ない」の聖句（伝道部の設立や人材の確保について意識）についてそれぞれ言及している。そしてこれらを読了し、12月13日以降「読経黙想の時をやめ明日より断然働きに着手 愛の働きをなさしめたまえ」と記していることから、岡山孤児院の運営に関して具体的な活動が意識され始めたことが理解できた。

5. 考察

明治25年の『日誌』の40日間に着目し、そこで行われた「読経黙想」の後、石井十次は、問題を抱えた施設運営に関して、「断然働きに着手」することとなった。これは、岡山孤児院の実践が創設者においては、施設実践の現在を振り返り、自身を再考する場・時間となっていることを史資料から読み取ることが出来たと理解した。こうした、「読経黙想」の場はいわば、施設実践におけるアイデンティティ形成の場であるとも言い換えることが出来、児童養護実践における施設のアイデンティティ形成の重要性を「社会福祉の歴史研究」の立場から提起できるのではないかと考える。

文献

杉山博昭(2024)『社会福祉実践における根源の探究-近代における歴史的展開を通して』時潮社、25-45頁／石井記念友愛社(1960)『石井十次日誌』（明治25年）石井記念友愛社／

ジョン・モンロー・ギブソン（1925）『ギブソン馬太傳講義』（古藤重光訳・林源十郎編）同人社印刷所（=The Expositor's Bible The Gospel of St. Matthew）／菊池義昭（2000）「明治20年代の岡山孤児院の運営体制と茶臼原移住（1）」『共栄学園短期大学研究紀要紀要』16、195-219頁